

相手の否定的側面を語る談話の組み立て方

—プレ行為とサイド・アクティビティーを中心に—

林 始恩

キーワード：否定的評価、プレ行為、サイド・アクティビティー、談話

1. はじめに

我々が行う会話の中では、相手に対する否定的な側面を指摘したり、相手の発話に対して否定的な反応を示すことがある。このような行為は、Brown&Levinson(1987)のFace-Threatening Actに該当する行為であり、相手を傷つける可能性がある。特に、相手のマイナス面に言及することは、初対面の人同士の会話ではなかなか起こりにくいことだと思われる。一方、親しい友人や何でも言える間柄の人との会話の中では、相手に対する否定的評価が現われることがしばしば見られる。これは親しさの現れとも言えるだろう。実際、友人同士で否定的評価が行われる場面を観察すると、冗談でさりげなく話す場面が多いが、反面、言いにくそうに相手に対する自分の考えを伝える場面もみられる。後者のように、相手のネガティブな側面を指摘する行為は、敏感 (delicate) な話題を取り入れることになり、会話において、話し手の慎重な態度が観察される。このような慎重な態度は、受け手の対応にも影響を及ぼし、話し手と聞き手は様々な相互行為を通して、談話を慎重に組み立てていく。

本稿では、相手に関する否定的な側面を取り上げて語るとき、どのように話を組み立てていくのかに注目し、我々が敏感な話題を導入する際、話し手と聞き手がどのような行為をしているのかを分析する。特に、話題の導入時に見られるプレ行為と話題展開の途中に現われるサイド・アクティビティーについて検証していきたいと思う。

2. 先行研究

2.1 プレ行為に関する研究 (西阪 2008, Schegloff 2006)

① Pre-invitation & Pre-request

「今月末ぐらい暇？」という質問は単なる質問ではなく、誘いや依頼が可能かどうか、その条件の一つを確認しようとしているものである(西阪, 2008)。これを Schegloff(2006)は、pre-invitation/pre-request としてみている。もし「今月末ぐらい暇？」という質問に「暇だ」と答えたならば、誘いや依頼が来ることが予測できる。反面、「忙しい」と答えたら、その質問が予測させる誘いなり依頼は、産出されないだろう。

② Pre-announcement & Pre-telling

プレ行為は、語りの前にそれがニュースであることを表す、または、そのニュースに対しての話し手の態度を表す場合もある。例えば、“Guess what”, “Y’ know ~”, “Did you hear the terrible news?” などの発言がそうである。

このようなプレ行為の聞き手の応答としては、go-ahead (先に進むこと促す) / blocking (阻止) / hedging (条件次第で先に進むこと促す) という三つの種類が来ることができる。そして、その応答様式によって、語り手は、次の発話を組み立てていく。

本稿で扱う語りは、相手のことについて話す特殊な語りである。このような語りは、非優先的な行為であるため、否定的な事柄を述べるまで、発話の遅延が起きることがよくみられる。つまり、否定的評価を行う話し手は、否定的評価を発する前に、プレ行為を通して、これから行う行為が多少敏感な話題であることを伝えている。本稿ではこのようなプレ行為がどのように現われているのかを分析する。

2.2 サイド・アクティビティーに関する研究

林 (2005) では、会話例の中で、飲み会に参加できるかどうかについての説明をしている話し手の発話の文内の途中、待ち合わせ時間を確認するアクティビティーが挿入された例を取り上げ、「括弧にくくられたアクティビティー」であると説明している。この会話例で「メイン・アクティビティー」はあくまでも進行中の状況説明であり、挿入されたアクティビティーは補足的な「サイド・アクティビティー」である。このサイド・アクティビティーは、単なる「わき道にそれた余談・脱線」などではなく、メイン・アクティビティーを完遂するために欠かせない重要な「予備行為」であると指摘している。

林 (2005) では、文脈に依存した「確認要求ー訂正」や「ことば探し」のサイド・アクティビティーを例示しているが、本稿で扱うサイド・アクティビティーは、聞き手が話し手の話題導入時に割り込んで行う「それた余談・脱線」に近い。しかし、この活動は会話連鎖上、「括弧にくくられたアクティビティー」である。このような挟みこまれた活動は何を行っているのか、またなぜその位置でその活動が行われたのかより詳しく考察する。

3. 会話データの概要

本稿で使用している会話データは、20代の親しい友人同士の会話である。男性ペア2組と女性ペア2組の会話を録音しており、録音時間は、計64分程度である。相手の否定的評価を誘導するために、「相手のくせについて、あるいは、相手の性格について」という話題を事前に提供して、それについて話してもらうことを依頼した。このような会話は、設定された中で行われたものであるため、タスク的な要素が強く、自然な会話とは言いにくい。しかし、会話参加者同士の相互行為においては、自然なやりとりが行われており、相互行為を分析する資料として分析する価値があると思われる。

データの中で、女性同士で行われた二つの会話断片を中心的に見ていくことにする。断片(1)は、OがNの初対面の印象について語る場面であり、断片(2)は、SがMのくせにつ

いて語る場面である。会話の中で相手の否定的評価や相手の否定的側面を指摘する部分を中心に、話題を取り入れるところから次の話題への転換までをひとまとまりの談話として焦点を当て、どのように話題を導入してお互いがどのように発話を組み立てていくのかを分析した。

4. 分析

4.1 プレ行為と談話の組み立て

まず、語りの導入部から否定的評価の発話のやりとりが行われるところまでに焦点を当てて観察する。断片(1)は、NとOが初対面の互いの印象について話している際に、OがNに対して、Nの初対面の印象が今とは違って自分の周りにいそうな人物ではなかったことに言及する場面である。今はお互いが親しい関係であるが、初めに会ったときはそうではなかったことを述べることは、それ自体が相手に対するマイナス面に触れることになり、敏感な話題となってしまう。このような敏感な話題を取り入れる行為において、Oは、どのように発話を組み立てていくのか。

分析に先だって、これ以前の会話内容を説明する。先ず、NがOについて、積極的でなれなれしいOの印象を述べていたが、それに対して、OはNをサークルで初めて見た時、サークルの皆から注目を浴びる、中心的な存在だったことを話す。Nは、そのようなOのほめに対して、笑いながら謙遜して受け止めている。「ほめ-反応」のやりとりが終わった後、Nは、「そんな、初対面の、印象」と今までのやりとり、つまり初対面の印象についての会話を終了しようと、トピックに区切りをつけて、締めくくっている(01行目)。しかし、その後Oは04行目からNの初対面の印象について今までとは違う側面を語り始める。

【断片(1)】 初対面の印象 (N-O 20代女性)

- 01 N: そんな、初[対面の、印象。
02 O: [(ん:)]
03 (0.6)
04 O:→そんなんか>初対面の印象<、私けっこうバンチョウは:
05 (0.8)
06 O:→なんやろうね、
07 (1.5)
08 O:→なんかね、今の印象と違うかも:(.)[¥けっこう.¥
09 N: [まじ↓で:
10 (0.8)
11 N: .hh 私、あんま変わつとらん.
12 O: ま(h)、そうやね hh[h

- 13 N: [hhh
14 O: ま:たぶんなんか私、全然変わらない[からだと思うけど
15 N: [なんか、明るくて(.)いい子、みたいなさ:。
16 O: あ:。hh ありがとう huhuhu
17 (0.8)
18 O: →バン[チョって最初たぶんなんか:
19 N: [その
20 O: →あんまり:(2.0)なんやろうね:なんかべ↑つに(.)苦手とかじゃないんやけど=
21 N: =うん
22 (1.0)
23 O: →[¥けっこう:(.)グッチと一緒にいる感じのタイプではないかなって言う[感じはあった。さいしょ¥
24 N: [あの [あ:。:。
25 (0.8)
26 O: ¥なん:やろうね。¥
27 N: hhh
28 O: [。hhh う:ん:
29 N: [あんまり、まわりにおらんかった:
30 O: ん、ままわりに:(0.8)ち↑がうところにおった。
31 N: あ:(.)おんなじところにおらんかった=
32 O: =おんなじところにおらんかった。感じかな:と思っとったけど:
33 (1.0)
34 O: でも違ったね。

04 行目から O は、「そうなんか初対面の印象、私けっこうバンチョウ (N のあだ名) は」と相手の初対面の印象について語り始めている。04 行目の発話の組み立て方をより詳しくみてみると、「そうなんか」で始めることによって今思い出したことであるように話題を取り入れている。そして「初対面の印象」というトピックを冒頭に示し語り直しているが、これは今行っている行為が課題（初対面の印象を話す課題）として与えられた設定を利用した言い方である。ここで、「私けっこうバンチョは」とあえて「私」という一人称を使用するのは、この以前の会話で、N が注目を浴びる一員で中心的な存在だったとほめる時、皆・全員がそのように評価していたと述べる時と対照的であり、この後語ることにについて、評価の主体が「私」一個人の意見であることを際立たせる。

そして、その後間が生じた後、「なんやろうね」(06 行) と言いよどみを見せ、1.5 秒の長い沈黙後、08 行目で「今の印象と違うかも」とぼかし表現を使いながら自分の意見を述べている。上で述べたように、今のように親しい関係で、初対面の印象が今と違うことは、ある程度相手についてネガティブなことに触れることに志向している。特にここでは、O

が今まで話していた口調が変わり、「なんやろうね」という言いよどみの発話が入ったり、「なんか」という曖昧なことを繰り返したりした非流暢的な口調になっていることから、これからマイナスな事柄を述べることを投射している (Schegloff, 1984)。

これに対して、N は 09 行目で、「まじ↓で:」と O の評価が意外であったことを示しているが、印象が違うことに対しては受け入れも反発もしない中立的な反応を見せている。

続いて 11 行から 16 行までは、N が O の印象を述べるやり取りが挟まれている。これはサイド・アクティビティとして扱い、次の節でさらに詳しく分析したいと思う。

18 行目から O は、「パンチョって最初たぶんなんか:」と言いながら、N の初対面の印象を述べる行為に戻っている。「最初」という単語を冒頭に置くことにより、元の行為に戻ることを明らかにしている。20 行目で「あんまり(2.0)、なんやろうね、なんか別に苦手とかじゃないんやけど」と述べているが、長い沈黙が挟まれ、非常に非流暢的な言い方で、言いにくい事柄を述べていることをマークしている。ここで、「苦手とかじゃないんやけど」という前置き表現を挟み入れることにより、後ろにネガティブなことを指摘することをより明らかにしている。

そして、23 行目で、「けっこう:(.)グッチと一緒に感じるのタイプではないかなって感じはあった.さいしょ」ということで、相手についての否定的な印象が述べられている。ここで「タイプ」という表現を使い、タイプに入るのか入らないのかというカテゴリー化をすることで、N を個人として評価しているわけではないことを示す。「さいしょ」という語を後ろに付け加えることにより、最初のみそうであり現在はそうではないことを際立たせている。そして、その後は N の反応や付加的な説明のやりとりが続く。

このように、O は N が最初会ったときは、自分の周りにいそうではないひとであったことを慎重に談話を組み立てて言及しており、敏感な話題を取り入れていることを表示している。23 行目に至るまで、様々な行為が挟まれ、否定的な印象を述べる発話が遅延されて出現することが観察された。このようなプレ行為がみられる別の会話例を見てみよう。

断片(2)は、S が M のくせを指摘する場面である。S は、M が人と話したり、ひとに会ったときに変な動きをしていることを述べている。これに対して、M は、最初は強く否定するが、S が具体的に例を挙げたり、変な動きを実現することを受けて、M は自分のくせを認める様子が見られる。

【断片(2)】 変な動き (S-M 20代女性)

01 S: →でもさ:けっこうのんちゃんさ: [あれだよね:くせとかさ:自分で全然自覚症状ないよね:

02 M: [ん:

03 (0.4)

04 M: だってくせなんかないよ.

05 (0.5)

06 S: hhhhe こわ:い[hhhh

- 07 M: [hhhhh]
- 08 M: え::私くせはないよ::
- 09 S: え:なんか::
- 10 M: うん
- 11 S:→あの::ひとと話してたりとか::
- 12 M: ん
- 13 S:→ひとに:[あつたときに::
- 14 M: [うまいね:はなしもってくるの::hh
- 15 S: [hhh そう,[ありがと:
- 16 M: [hhh [hhh
- 17 S:→¥あつた¥ときに:(.)¥へん(h)な動きする¥とか::
- 18 M: あつた[ときに::?
- 19 S:→ [▷しよつちゆうしてるじゃん:<
- 20 S:→しよつちゆなんかへんな、機械の動きをする[とか::
- 21 M: [uhhhhh うそ:(h)しな[いよ:
- 22 S: [なんか
- 23 S: ふつうにみんな集まってしゃべっても:なんか::とつじよ、たぶんあきてくるんだと[思う
んだけど::
- 24 J: [hhh
- 25 M: よく知ってるね:
- 26 S: とつじよ、なんか(0.5)フウウンって
- 27 M: hhh[hhhhhhh
- 28 S: [え↑え、どうしたの::
- 29 S: それを:しよりし、うまく処理するのが私の目標.
- 30 M: a[hhhhhh な
- 31 S: [hhhhhhh
- 32 M: あ、そうなんだ.

01行目の「でもさ:のんちゃんさ::あれだよね:くせとかさ:自分で全然自覚症状ないよね:」というSの発話は、質問の形式として行われているが、この会話の設定上、これからSがMのくせについて語ることを予告する話題の取り入れ方である。この会話は、事前に「相手のくせについて」話すように指示されたなかで行われたものであり、この部分は会話録音の開始部に該当する。この直前の会話では、共通の知人についてなど、指示している活動とは関係のない別の話題で話が行われているが、01行目からSは、本題である相手のくせについて言及をし始めている。

この発話の組み立てを詳しくみてみると、「でもさ:けっこうのんちゃんさ::」で「で

もさ：」と逆接の接続詞で発話を話し始め、これから今までとは異なる活動に入ることを予告している。「あれだよね」と話を始める「あれ」は、林（2008）で言及されている「ダメ一語」であり、「あれ」の指示対象が後続の発話の中で特定されることを予告・予告しているものである。このように、「でもさ：」「けっこう」という言い方や「あれ」を用いて、核心について述べるのを遅らせている発話順番のフォーマットが、何かネガティブなことを語ろうとしていることを予告しているといえる。その後、「くせとか、自覚症状ないよね：」と「くせ」という語りのトピックとして取り上げ、相手の同意を求める形で話題を取り入れている。

Sが行ったこの発話は、Mがくせの自覚症状があるのかないのかを知りたくて行った質問ではなく、「自覚症状ないよね」と同意を求める言い方で、相手のくせについての話の語りを拡張するためのプレ行為である。

しかし、同意が期待された形のSの発話に対して、Mは04行目で、「だっつくせなんかいいよ」と答え、Sのプレ行為を強く拒絶している。つまり、Mは、自分にくせがあるという前提自体を否定しているのである。

その後、05行目で0.5秒の沈黙が生じているが、この沈黙は、SがこれからMのくせについて語りを拡張しようとしたが、強く拒絶されたため、次の発話をすぐに述べられない状態を表す。そして、06行目で、Mが拒絶した行為自体に対して「こわ：いhh」と述べ、同意も不同意も表さず、Mのきっぱりと拒絶する行為がこわいという評価をしている。この発話と同時に、Sは、笑いを加えるが、その後Mも笑っている（06-07行）。このように、二人とも笑うことによって、相手の非同意を真剣に受け止めたのではなく、冗談として行われたことを両者が認識している。

Mは、08行で「え：：私くせはないよ：：」とくせがないことを再び述べ、自分自身に対して弁解している。これは、最初04行目でMが「くせなんかいいよ」と拒絶したことに対して、Sが「こわい」と評価されているが、Mにくせがないことについて同意も非同意も示していないので「え：：私くせはないよ：：」と再度主張しているものである。

そして、Sは、Mのくせがないという発言を認めず、09行目「え、なんか：：」から例を挙げながら説明をし始める。ここで「え、なんか：：」の「え」は、相手の直前の発言を認めないことを反応として示しており（Hayashi, 2009）、「なんか：：」は、これから説明・語りを始めることを予告している。11行目から「あの：：ひとと話してたりとか：：」「ひとに：：あったときに：：」とくせが出る場面を例示していくが、発話の語尾を延ばし、相手の様子を伺いながら発話を発することによって、敏感な話題に言及していることをマークしている。

Sの13行目の発話の途中、Mは「うまいね：はなしもってくるの：：hh」（14行目）と割り込んでSをほめている。これは、今のくせについての話題とは関係がないが、会話録音において、Sの話題の取り入れ方がうまいことをほめるサイド・アクティビティーが産出されたものであるが、これについては、4.2節で述べることにする。

17行目で元の活動に戻っているが、Sは「あったときに」と、13行目の発話（「ひとにあったときに」）の後ろの部分の繰り返し、Mのくせについての話題に戻っていることを示している。そして「¥あった¥ときに：(.)¥へん(h)な動きする¥とか：」とMのくせについて、変な動きをするという指摘が行われている。

このように、相手のくせの指摘など多少敏感になりやすい行為を述べる時、プレ行為を行い、肝心の発話（否定的評価）に至るまで遅延が起きることによって、慎重に談話を組み立てていることを相手に示している。

4.2 サイド・アクティビティーの挿入

4.2節では、断片(1)と(2)で現われたサイド・アクティビティーについて、ターンの構成を中心に詳しく分析する。本稿で言及するサイド・アクティビティーは、語りの途中挟まれたやりとりであり、本話題とは逸れた別の活動として行われている。

まず、断片(1)では、OがNの初対面の印象を語っているなか、11行目から16行目までNがOの初対面の印象を語る活動が挟まれている。

【断片(1)】 初対面の印象

08 O: →なんかね、今の印象と違うかも：(.) [¥けっこう.¥

09 N: [まじ↓で:

10 (0.8)

11 N: .hh 私、あんま変わったらん。

12 O: ま(h)、そうやね hh[h

13 N: [hhh

14 O: ま: たぶんなんか私、全然変わらない[からだと思うけど

15 N: [なんか、明るくて(.)いい子、みたいなさ: :

16 O: あ: :hh ありがとう huhuhu

17 (0.8)

18 O: →バン[チョって最初たぶんなんか:

まず、Nのサイド・アクティビティーの開始の位置から検討する。08行目でOが「今の印象とちがうかも」ということを聞いたとき、Nは、「まじ↓で:」と予想外であった反応を示している(09行目)。このような「意見-反応」のシーケンスは、隣接ペアの第一ペア成分と第二ペア成分になっており、その後は、ふたりのうちのどちらかが話し始めてもよい位置である。10行目で、0.8秒程度の間が生じておるが、結局、11行目からNがOについて語る発話を始めている。

08行目のような発話を聞いたとき、自分の事柄を話されている受け手側（ここではN）の反応として行われる行為は二つに分けることができる。一つは、話し手を促して話題を

拡張していくことである。例えば、この会話の場合だと、「今の印象と違うかも」と言われたとき、「どう違うの?」「そうなの?どこが?」と質問しながらターンを拡張することができる。またもう一つは、受け手は話を他の話題に逸らしたり、他の活動を行ったりすることができる。ここでは、N自身が相手の初対面の印象を語り始め、後者の選択肢が用いられている。Nは、11行目から「私、あんま変わっとらん」と自分の場合、Oの印象があまり変わってないことを述べている。つまり、ネガティブな評価の受け手のほうが、自分の考えを示し、話の脱線を行うことで、相互行為の継続を促している。

サイド・アクティビティー内のシークエンス(連鎖)構造を見てみよう。この挟まれたシークエンスの中では評価の与え手と受け手が元の活動とは逆転している。Nは、「私、あんま変わっとらん」と言い、Oの印象があまり変わってないことを述べ、評価の主体になる。それに対して、評価の対象となったOは「ま、そうやね」と笑いながら反応を示し(12行)、「ま: たぶんなんか私、全然変わらないからだと思うけど」と自分自身が変わらないことを、「全然変わらない」という言い方でややネガティブに述べている(14行目)。この発話の「全然変わらない」まで聞いたところ、Nは、「なんか、明るくていい子みたいなさ: :」と説明を加えている(15行目)。Oの発話の途中にも関わらず、Nがこの位置で説明を付け加えているのは、Nの11行目の発話を、Oが「私は全然変わらないからだ」とネガティブに受け止めているので、「明るくていい子」という意味で変わっていないことをできるだけ早く述べる必要があったからである。

15行目のNの発話「なんか明るくていい子みたいなさ: :」はOの初対面の印象についてプラスの評価を行っている。この「明るくていい子」という発話は、ポジティブなイメージを持ったことをコンパクトで簡潔した言い方で話している。この評価に対して、Oは「あ: : hh ありがとう huhuhu」と照れ笑いを見せながらNのほめを受け入れている。ここでOが「ありがとう」と簡潔に受け止めることで、Oは、Nの「ほめ-受け入れ」のやりとりをこれ以上拡張せず、そのやりとりを終わらせている。そして、Oは、18行目からNの初対面の印象を述べる行為に戻っている。

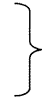
断片(1)では、OがNの初対面の印象が今とは違うことを端的に述べ、Nが反応を見せる合間を作っている。それに対して、Nは中立的な反応(「まじ↓で:」)のみを示し、逆にOの初対面の印象について語る活動を開始している。このようにN自身が相手の印象を述べることによって、相互行為の継続を促しているのが見られる。そのやりとりが「括弧にくくられたアクティビティー」であることは、Nが「明るくていい子」のように切り詰めた言い方で相手をほめ、これに対しOは、「ありがとう」と受け止めることでシークエンスを終えており、本筋に戻っていることからわかる。

「話りの脱線」がより明示的に挿入されている断片(2)の場合を見てみよう。

【断片(2)】 変な動き

11 S: あの:ひとと話してたりとか: :

- 12 M: ん
 13 S: ひとに:[:あったときに:.
 14 M: [うまいね:はなしもってくるの::hh
 15 S: [hhh そう、[ありがとう:
 16 M: [hhh [hhh
 17 S: ¥あった¥ときに:(.)¥へん(h)な動きする¥とか:.



ここで、サイド・アクティビティーとなるのは、14行目のMの発話から16行目のMの笑いまでである。ここでは、13行目のSの発話の途中、Mが「うまいね、話もってくるの」(14行目)と、Sの話題の取り入れ方のうまさをほめており、そのほめに対してSが「そう?ありがとう」と受け入れるシーケンスが挟まれている。この「ほめ-受け入れ」の連鎖の内容は、会話の設定上の事柄に関する内容であり、今まで、SがMの変な動きをすることを指摘する活動とは別のことをしている。

14行目の「うまいね、はなしもってくるの」という発話の位置と組み立て方を詳しくみる。Mは、13行目の相手の発話が終わっていないのにも関わらず、割り込んで相手をほめる行為を開始している。冒頭に「うまいね」とほめることが先に来て、後から「話もってくるの」と何をほめているのかを付けたしており、倒置が起こっている。ここで倒置が起こったのは、相手が発話を産出している途中に割り込んでいるため、明示的な行為(ここでは「ほめ」)をターンの最初に配置しており、その詳細な内容(ほめの対象)を後ろから付け加えているためである。

15行目のほめに対する応答を見てみると、Sは「ありがとう」と言いながら、最小限の受け止め方をしている。ここで、相手のほめに対して拒絶や他の反応が来れば、シーケンスは他の方向に拡張していく可能性が高い。しかし、Sは「ありがとう」と受け入れることで、それ以上行為を広げず、元の行為(相手の変な動きを指摘する活動)に戻っている。

断片(2)では、サイド・アクティビティーが否定的側面を指摘されているMにより行われている。09行目から言いくさそうに発話を開始していたSへ、聞き手であったMが「話もってくるのがうまい」とほめることは、話の流れから脱線した別の活動を取り入れることで、相手への負担を軽減する作用をしている。

5. 考察およびまとめ

相手の否定的な側面を語る談話の中で、プレ行為は、これから敏感な話題を取り入れることを予告しており、相手の反応などを見ながら慎重に談話を組み立てるための装置として作用している。また、上に挙げた会話例で見られるように、様々なプレ行為により、否定的評価の発話は遅延されて出現する。このような発話の遅延は、相手の事柄について述べる行為が非優先的なことであることを表示する語り方である(Pomerantz, 1984)。

さらに、相手への否定的評価など、敏感な話題の会話の展開中には、サイド・アクティビティーが挿入されることがよくみられる。林 (2005) では、サイド・アクティビティーは、単なる「わき道にそれた余談・脱線」などではなく、メイン・アクティビティーを完遂するために欠かせない重要な「予備行為」であることを述べている。しかし、上に挙げているサイド・アクティビティーは、メイン・アクティビティーに欠かせない行為であるとはいにくく、むしろ「余談・脱線」に近い側面もある。では、このようなサイド・アクティビティーを通して語り手や受け手は何をしているのだろうか。

一つの解釈としては、敏感な話題を述べるメイン活動から一時期、他の活動をすることで微妙な場の雰囲気や和らげているという解釈ができる。サイド・アクティビティーを挿入することで、その間笑いが生じたり、場の雰囲気を盛り上げることによって、緊張感を和らげる効果があると思われる。会話例として挙げた二つの断片では、受け手（否定的評価を受ける側）がサイド・アクティビティーを開始している。否定的評価を行う話し手は、否定的評価の談話を組み立てる際、今敏感な行為をしていることをマークし、慎重に談話を組み立てていることを示すが、これを把握した受け手は、ターンをこれ以上拡張し、相手に詳しく言わせるより、むしろ脇道にそれた余談・脱線を挿入することにより、お互いがより負担を減らす方向に発話を誘導している。

サイド・アクティビティーについては、どこからどこまでがサイド的な活動であるかについてさらに検討し、何のために行われているのか、より詳しい分析が必要である。

本稿では、相手の否定的な評価を行ったり、相手の否定的な側面を指摘するというデリケートな話題の語りの展開において、プレ行為とサイド・アクティビティーの存在について分析を行った。相手に対して触れる、しかもマイナス面に言及することは、FTA になりえるので、お互いの配慮が必要となる。このように、敏感な話題の導入時に話し手が行うプレ行為や、聞き手が開始するサイド・アクティビティーは、相手に向けた相互作用の結果として現われるものであると言える。

【参考文献】

- 田中 博子(2008)「阿吽の呼吸・暗示的談話の生成」社会言語科学 10(2),109-120
- 林 誠(2005)「『文』内におけるインターアクションー日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって」串田秀也・定延利之・伝康晴(編)『活動としての文と発話』ひつじ書房 pp. 1-26.
- 林 誠(2008)「相互行為の資源としての投射と文法 - 指示詞『あれ』の行為投射的用法をめぐって」社会言語科学 10(2), 16-28.
- 西阪仰(2008)「Pre-pre (プレプレ)」『言語』37(5): 72-77
- Brown,P.&Levinson,S.C.(1987) Politeness: Some universals in language usage. Cambridge, Cambridge University Press
- Hayashi, Makoto (2009) Marking a 'noticing of departure' in talk: *Eh*-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 41(10)

Jefferson, Gail (1972) Side sequences. In D.N. Sudnow (Ed.) Studies in social interaction (pp.294-33). New York, NY: Free Press.

Pomerantz, A. (1984) Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred / dispreferred turn shapes.

Schegloff, Emanuel A. (1984) One some gestures' relation to talk. In Atkinson, J.Maxwell,&Heritage, John(Eds), Structures of social action: Studies in conversation analysis.

Schegloff, Emanuel A. (2006) Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis. Cambridge: Cambridge University Press.

【文字化データの記号】

- ・ 語尾の音が下がって区切りがついたことはピリオドで示される
- , 音が少し下がって弾みがついていることはカンマで(,)で示される
- ? 語尾の音が上がっていることは疑問符(?)で示される
- [複数の参加者の発する音声が重なり初めている時点は、角括弧([])で示される
- [] 重なり終わりが示されることもある
- = 二つの発話が途切れなく密着していることは、等号(=)で示される
- (XXX) 聞き取り不可能な箇所は、(XXX)で示される。空白の大きさは聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している
- 言葉 : : 直前の音が伸ばされていることは、コロンの数で示される。コロンの数は引き伸ばしの相対的な長さに対応している
- 言ー 言葉が不完全なまま区切れていることは、ハイフンで示される。
- h 呼気音は h で示される。笑いを表すものにも用いられる
- 言葉 h 笑いながら発話が産出される時、そのことは、呼気を伴う音の後に h を挟むことで示される
- ¥ ¥ 発話が笑いながらなされているわけではないが、笑い声でなされることもある。そのときは、該当箇所を ¥ で囲む
- 言葉 音の強さは下線によって示される
- ↑ ↓ 音調の極端な上がり下がり、それぞれ上向き矢印(↑)と下向き矢印(↓)で示される
- ° ° 音が小さいことは、該当箇所が ° で囲まれることにより示される